

白山ふるさと文学賞

第四回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生作文の部 優秀賞

## 父の教訓

北辰中学校三年

倉下くらした

明日見あすみ

私は今まで親に「遊ぶ暇があるなら勉強しなさい」と言われたことがありません。小学校低学年の頃は、周りの友達がよく言われているその言葉を自分の親が言わないことを不思議に思っていました。私は体が弱いこともないので、友人とはいっても遊ぶことができません。本当は遊ぶことより勉強することのほうが大切なのではないかということや、親が私に自主的に勉強をさせるためにわざわざ言わないのではないか、ということをもやもやと思っていました。そんなとき学校の先生から「友情とは何か」を考えるとという宿題が出されました。

先生から出された宿題は、当時の私にとっても難しいものでした。答えに悩み、困り果てていた私は父が「遊ぶなら勉強しろ」と言わないことを「勉強よりも友情が大切である」と考えているからだと思い、父にそれを言わない理由を聞くことにしました。しかし、父に聞いたその理由は私が考えていたこととは少しだけ違ったものでした。

私の父には、小学校、中学校、高校の同級生でとても仲の良かったMさんという友達がいました。その人は仲間に非常に優しく、誰かが困っていれば自分から関わってゆく、責任感があって情に厚い人でした。そのため、同級生や先輩、後輩、周りの大人からも一目置かれる存在だったそうです。小学生、中学生の頃、父とMさんは毎日のように一緒に遊んでいました。しかし高校を卒業すると、出掛ける約束はするもの予定が合わず、なかなか会うことができなくなっていました。いつしか二十歳も過ぎ、仕事も任せられるようになり、本格的に忙しい日々がやってきました。そんなある日、専業主婦だった母が家でテレビのニュースを見ていると、交通事故の速報が入ってきました。ぼんやりと見ていた母は、聞こえてきた名前に耳を疑いました。それがMさんの名前だったからです。母は急いで会社に行った父に電話をかけました。父は母から聞いた話に衝撃を受けましたが、心の底では信じたくないという気持ちが残っていて、仕事でつながりのあった道路を管理する会社で働く人に、本当に事故があったのかということと、事故にあった人が本当にMさん

であったのかということをとわずねました。答えは父が望んでいたものは逆のものでした。

私はこの話をしてくれたときの父の顔が忘れられません。滅多に泣かない父が、目を赤くさせ、上と下の唇を噛むようにびったりと合わせ、涙をこらえるようにしていたからです。声も涙声で、Mさんを失った痛みがひしひしと伝わってきました。しかし、それなのに父は「嬉しい。」

と一言つぶやいたのです。私にはその言葉の意味がまったく理解できなくて、何が嬉しいのかと聞くと父は

「親や周りの人には、つらいことなんだから思いっきり悲しんで泣いたら忘れてしまえ、思い出しても幸せになる人はいないんだよと言われていて、動揺していた自分はそれを鵜呑みにして忘れようとし続けてきたけれど、今になって話してみたら口から滑るみたいに言葉が出てきて、忘れなくてよかったと思つたし、これからも忘れたくないと思つた。頭の中に忘れたくない友達がいるということがすごく嬉しい。」

と答え、  
「本当は、誰かの中の絶対に忘れたくない友達になつてもらうために、友達と一生忘れないような楽しい出来事をたくさん作つてもらうために、自分たちが親になつたら子どもは友達と目一杯遊ばせてあげようとお母さんと決めていたんだよ。」

私は、この話を父から聞いたとき、当たり前前に思っていたいつでも会える友達がいることに心から感謝しました。また、父と母が私のために作ってくれていた時間でできた大切な友人と、その友人との言葉にならないほどの価値がある思い出や記憶を、いつまでも心に溜めておきたいと思えました。これからは父と母が望んだ、より多くの人の忘れたくない友人になれるように頑張っていきたいと思えます。